

# 情観光

中国・浙江省  
ZHEJIANG PROVINCE, CHINA

2021 Vol.1

海客談瀛洲煙濤微茫信難求越人語天姥雲霞明滅或  
 可睹天姥連天向天橫勢拔五岳掩赤城天臺四萬八千  
 丈對此欲倒東南傾我欲因之夢吳越一夜飛度鏡湖月  
 湖月照我影送我展身登青溪  
 猿啼足下聲謝公屐處花狂  
 千岩萬壑轉蒼翠山色有无中  
 深林人不知明月來相照  
 丘壑存  
 金銀臺  
 初唐四傑  
 長嗟  
 來萬事  
 即騎訪名山  
 安能推眉折腰事權貴使我不得開心顏

THE ROAD OF TANG POETRY IN EASTERN ZHEJIANG  
 唐詩の道

古来より、中国の文人墨客は山水に親しんできた。特に浙江省はその秀麗な山々と清らかな水をもって李白や杜甫を含む数百人の詩人を魅了した。ここでは、詩人達が1500編余りの傑作を残した。高い志を抱える彼らは自分の足で世界を測り、その足跡が道となり、現在の浙東唐詩の道を作った。

钱塘江畔に位置する杭州の西興渡し場を起点とし、この道は浙東運河・曹娥江一椒江を幹線とし、杭州、寧波、紹興、台州、舟山の5つの町を通っている。それは山を越え、谷を渡り、溪流や川を受け入れ、全長が200キロメートル近くもある文学の道、山水の道、巡礼の道である。



### 杭州

江南偃んで杭州番が懐かし

「水光潋滟晴方好」  
 (水光激艶として晴れて方に好)  
 (山色空蒙雨亦奇)  
 (山色空蒙として雨亦奇なり)  
 欲把西湖比西子)  
 若し西湖を把へて西子に比すれば)  
 淡粧濃抹總相宜)  
 (淡粧濃抹總て相宜し)」

● 詩と画の憧憬・西湖

14・16世紀に、多くの日本禅僧が中国に留学してきた。彼らが杭州西湖に出会った。帰ることも忘れるほどあつたという間に魅せられた。その杭州西湖への憧憬は、今になっても消えていない。

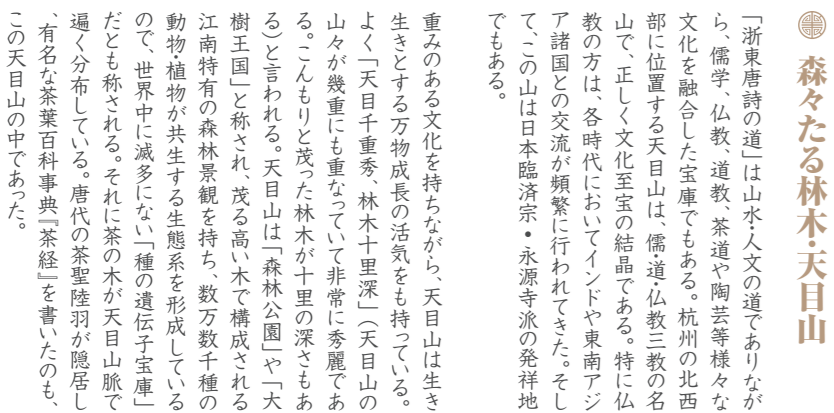
「多くの人々が、西湖に似ている日本の名勝地を取り出し、西湖だと思つて、梅の下で友を酒を飲みながら、詩歌を作る。庭園を造る時も、西湖を象つてスポットを取り入れる。」  
 早稲田大学内山精也教授の言ったように、無数の素晴らしい景色が西湖を飾るが、西湖は華やかな珍宝のように、人々の目を輝かせる。



### 森々たる林木・天目山

「浙東唐詩の道」は山水人文の道でありながら、儒学、仏教、道教、茶道や陶芸等様々な文化を融合した宝庫でもある。杭州の北西部に位置する天目山は、儒道仏教の名山で、正しく文化至宝の結晶である。特に仏教の方は、各時代においてインドや東南アジア諸国との交流が頻繁に行われてきた。そしてこの山は日本臨濟宗・永源寺の發祥地でもある。

重みのある文化を持ちながら、天目山は生き生きとする万物成長の活気も持っている。よく「天目千重秀、林木十里深」。天目山の山々が幾重にも重なり、非常に秀麗である。こんもりと茂った林木が十里の深さもあると言われる。天目山は「森林公園」や「大樹王国」と称され、茂る高い木で構成される江南特有の森林景觀を持ち、数万数千種の動物植物が共生する生態系を形成している。そのため、世界中に滅多にならぬ種の遺伝子宝庫だとも称される。それに茶の木が天目山脈で遍く分布している。唐代の茶聖陸羽が陸居し、有名な茶葉百科事典「茶経」を書いたのも、この天目山の中であつた。



### 西冷印社

西冷印社海外との文化交流を頻繁に行われてきた。その中に、日本の書法篆刻界との交流が最も多く、実は、西冷印社が結成される前に、日本の印人河井仙郎が既に名声を轟かせ、後の社長呉昌碩の元で印学を学んだ。そして、彼はとうとう日本印学・時の師匠となった。初期西冷印社も、人の社員長尾申も、呉昌碩家の隣で3年間住んでいた。今も見えるが、西冷印社社北の石壁に刻まれる「印泉」の二文字は、即ち長尾申が書いたものである。



### 文人の帰る場所・西冷印社

1904年、杭州城の西冷橋畔、意気投合する四名の中国篆刻家が、中国現存の最も長い歴史を持つ文人団体、篆刻専門の団体である「西冷印社」を結成した。西冷印社の中で、メンバー達が作画したり、詩吟をしたり、秘蔵を鑑賞したり、お茶を飲みながら雑談をしたり、色んな風流を遊びしたりして、千年前の杭州と同じように、文人の「雅」と江南の「詩」が何時でも見られる。



## 紹興

自名山を愛して剡中に入る

浙東・唐詩古道



THE ROAD OF TANG POETRY IN EASTERN ZHEJIANG

李白の詩が曰く「此行不為鱸魚膾 自愛名山入剡中 此行不為鱸魚膾の膾の為ならず、自ら名山を愛して剡中に入る」。詩人達が万里の旅をするのは、決して腹を膨らませるためではなく、名山大河を遊歴する為であった。そして、山や川の景色を満喫するのに、剡中（今の紹興嵊州、新昌）は、ついでつけの所である。

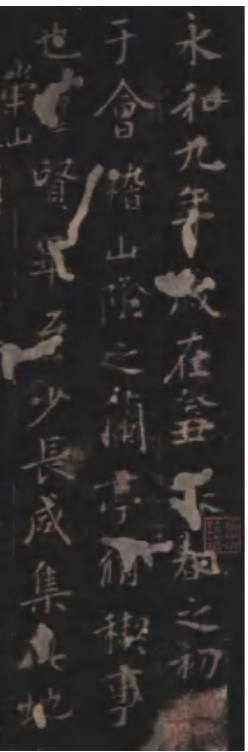
紀元前470年、春秋戦国時代に、越王勾践は会稽山近くの平原で國都を築き上げた。古称「大越」のその町は、今の紹興に当たった。書聖王羲之がいる東晋時代に、紹興は会稽郡と称され、当時全国で最も繁栄した大郡となった。2500年余りの歴史を持ち、詩人達に深く愛される名山大河があるのに、紹興はその町中を緩やかに通る剡溪と同じ性格で、落ち着きがあって、淡々としている。

## 山水に情を宿す・蘭亭

唐詩の道が通る紹興では、どの昔に、東晋時代において既に「詩意」が見られるようになった。今より一千年余り前の初春、王羲之が士族の文人達と会稽郡山陰城の蘭亭で宴を開いた。それは王羲之の家中の庭園だった。觴をくねくねと流れ下がる曲水に置いて、止またら人々は酒を飲んで自作の詩を朗詠した。その後、できた詩を詩集に編んだ。酒に酔いながら、書聖王羲之が興に乗じて筆を走らせ、序文を書きあげた。これで、「天下第一行書」の「蘭亭集序」が誕生した。

「此の地に、崇山峻嶺、茂林脩竹有り。又、清流激湍有りて、左右に葺帯す。引きて以て流觴の曲水と爲し、其次に列坐す。」紹興の風貌は、正しく「蘭亭集序」の書いた通り、そよ風が吹くと、竹の葉がゆるりと地に落ち、輝かしい太陽の下で波光が煌めく、高山流水のこく小さな変化によつて、文人達が無量の感慨を覚える。

紹興の南西の山奥に、蘭亭庭園が今も残されている。それは明時代に再建されたもので、流觴曲水を中心として、周りに亭台楼閣や池等の景観を設置し、蘭亭の雅集は既に代々の風習となつて、景を通して情を表し、或いは是れ触れて情を催すのが、どうやら中国文人達共通の気晴らし方法になっているらしい。



## 詩の溪流若耶溪

神秘的な色合いに満ちて、悠久の歴史を語る若耶溪は紹興の東南部を流れている。今は、平水江と名付けられた。他の大河のように高名を持たず、若耶溪はただ黙々と幾千の岩や谷を越えて北の鏡湖に注ぐ物静かな溪流であるが、それに關わる多くの神話や伝説が伝わっている。伝説によると、太古時代に、帝王大禹が洪水を治めるフツを書き、ある天書を得たのは、この溪流の畔だったという。そして、製劍の始祖とされる欧冶子がこの溪流の畔で伝説の神劍を作った話もある。

「起坐魚鳥間 動搖山水影。」

唐代詩人崔顥は先人の跡を追い、船に乗つて若耶溪を堪能した。周りの深い森と雲に包まれながら、彼は船の上に目を走らせ、思いを馳せた。座る時に仰いで空を飛ぶ鳥たちを見、立つ時に俯いで水を遊ぶ魚群を見た。軽い船が鏡鏡たる青山の投影を揺らした。

その後、山水詩人孟浩然、侍僧皎然等々、益々多くの唐代詩人が流れに從つて南下した。紹興若耶溪、文人墨客によつて、徐々に愛らしい、のんびり場所となり、山川を遊歴し、世の中の清流を尋ねる為にならず通る場所となった。



## 台州

碧玉連環して四面の山

浙東・唐詩古道



THE ROAD OF TANG POETRY IN EASTERN ZHEJIANG



## 詩人と仙人との出会い・神仙居

「遊客瀟湘を談ず、煙濤微茫にして信に求め難し。越人天姥を語る、雲霓明滅或は晴る可し。」

天姥山を謳歌する詩文の中に、大詩人李白の「夢遊天姥吟留別」はその最も輝かしい一編だと見える。李白は中国全土を巡り、無数の山水を見てきたが、夢にまで見るほど忘れられないのは、天姥山だけだった。「臨海県誌」によると、天姥山は現在の台州市仙居県の神仙居景勝地内に位置して、立ち込める仙雲の中に隠れたり、現れたりして、仙境ではないが、その風景が仙境にも勝るといふ。

「霓を衣と爲し風を馬と爲し、雲の君紛紛として来り下る。虎は瑟を鼓し鸞は車を回らし、仙人の行列をこゝろの如し。」

七彩の虹を衣裳にし、馬に乗るように長風を制御し、雲中の仙人が紛紛として天姥山に下りてきた。山中の虎は彼らの為に瑟を鼓し、鸞鳥は車を回らす。マンチクな李白の夢だったが、このような幻の景色が神仙居で見られる。神仙居は地質構造が独特で、険しい山々が幾重にも重なって、千変万化の姿をしている。生い茂った草木に覆われ、正に大自然の傑作だ。仙境だから、当然普通の景勝地とは違う。朝になると、色とりどりの陽光が雲霧を彩る。雲が清風に吹かれ、巻いたり広がったりすると、仙人が今に下りてくるんじゃないか、人々に思わせる。それで、「こゝは神仙が住居する場所だと命名された。」



## 舟山

凡人としての間に入れて何と幸せだ

浙東・唐詩古道



THE ROAD OF TANG POETRY IN EASTERN ZHEJIANG



## 海上の仙山普陀山

「縹渺雲飛海上山（縹渺たる雲が海上の山の頂上を漂う）」は元代の楷書大師趙孟頫が舟山に位置する普陀山を描く詩句。普陀山は広い海に聳え立ち、島でありながら山でもある。

「瀾草岩花多瑞氣、石林水府隔塵寰。（谷川の草や岩山の花が瑞気多く、石林と水府が浮世を隔てる）」透き通った谷川の水が草木を濯洗し、花が岩山で盛んに咲いている。これほど美しい景色が奇怪な山と広大な海洋の中にあるから、普陀山をより一層神秘的で、香麗にした。普通の海島では、森とされるほど木が多くないが、普陀山だけは木が茂っていて、高齡の樟も彼方此方にある。

普陀山は中国仏教四大名山の一つで、景勝地には大小のお寺が林立している。その中に、普濟禪寺、惠濟禪寺、法雨禪寺が最も有名である。そして山には南海観音の大像が佇立している。普陀山では、「一本の草や木、一枚の葉や輪の花でも仏の光を浴びながら盛んに成長している。これだから、趙孟頫が「何ぞ凡身到此間（凡人としてこの間に入れて何と幸せだ）」と感嘆した。ちっぽけな人間が、この仙山に来て、佛光を浴びることができるとは、何とどう幸運だったか。

